

の賊』とを併せて退治せねばならぬので有るからウツカリしては居られぬ筈で有る。

斯くの如くに考へれば、我々の一身の責は大である、随つて我々の闘はねばならぬ戦は又大である弱ければ斃れてしまふ、斃れては一身一家の爲乃至他人の爲にならぬ、弱いのは罪の元である、弱いのは多くの惡を生む者である、獅子王の如くなる心を持てる者が佛に成ると云ふのは、至言で有る、獨り日蓮聖人の當時に於て、然る事ならず、今後の世に於て益々然りと考へなければならぬ。

人の人たる價值は、學問や經歷や身分では定まらぬ事を知らねばならぬ、我が足で地を踏んで立たう、我が眼で見て我が頭で考へて進まう、何物が崩れかゝつて來ても決して動くまいと、斯う決心する事が第一に肝要で有る。

以上

土牢を訪ふ

菊 田 雄 壽

江ノ島電車は暑い海岸を濱風に吹かれながら鎌倉を指して進み、稻身ヶ崎、極樂寺を過ぎて長谷の停車場に着いた、

私は此處で下車して路を光則寺の方へ取つた、太陽は焼きつく様に照らす、程なく長谷觀音の堂を過ぎて、左に折れた小路を辿ると、光則寺の正面に出る、流石に何處となく靈蹟らしい一種云ひやうない嚴肅な氣分に、打たれた。

御首題を頂いて庫裏の右手の石段を登つて行くと、青葉が路を染め、涼しい風は頬を吹き、青葉の蔭から漏れて来る數條の日の光も亦昔を語つて居る。

やがて登り詰めると、若葉が陽の光を障つた隅に、前方を格子で造られた土の牢がある、これこそ師孝第一と言はれた日朗上人の幽閉された十牢である。

昔を偲ぶに文永八年九月十二日宗祖大師が龍ノ口に於いて頸の座に打据えられ給ひし時、太刀取り依智の三郎直重の持ちたる刀の柄に取りすがり、「此の日朗が頸をはねて御師匠様の身代り」にと一念凝したる金剛力も空しく、邪魔な坊主と、役人輩は慈悲も情もなく荒縄で縛り、今の光則寺の處の宿屋左工門が館の此の土牢に押し込めてしまつた。

此の様を不憫に思召された大聖人は、御自分も明日鳥も通はぬ佐渡ヶ島へ御流罪となる十月九日に、師弟の御愛情も濃やかに認められし御文こそ、かの有名な土牢御書である。

「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今夜の寒さにつけても牢の内の有様思ひやられて痛はしくこそ候へ」云云

牢の内に居る日朗上人と今年十三歳の三位公はどんな氣持だつたらう。

師は遠く絶海の孤島に去り、我は暗き土牢の奥に押込められ、冷氣肌をさし、夢にさへも見奉る事能はず。共に共に泣きもだへた事であらう。

今は牢の内の壁はくづれ一入に哀傷の趣が深く轉た暗涙にむせんのだつた。

—(終)—